

# わが街角 (二)

早乙女勝元



# わが街角

(二)

早乙女勝元

新潮社版



わが街角<sup>まじかど</sup>  
(二)

昭和四十八年十月二十日 発行  
昭和五十四年十月三十日 六刷

定価八九〇円

著者 早乙女勝元<sup>さおとめかつもと</sup>

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一  
郵便番号 一六二  
電話 東京(六)五二(業務)  
東京(六)五二(編集)  
振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが、小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

わが街角  
(二)



第五章





その日は、めずらしく駿之助が家にいた。そして、またどういふ風の吹きまわしか、まだ明るいうちに、一杯きげんで、かえってきた。しかし、そうは飲んでいない。手にした紙包みを鈴の前に放りだし、

「肉だ」

と、いった。

「え？ なんだって？」

鈴はききかえず。

「肉だといってるんだ。それもトビキリ上等のやつだ。きょうは、特別めでたい日だぞ。肉屋も黒山の人だった」

「ほんとかえ？」

鈴はまた、目を見はった。いちいちおどろいていたらきりがないので、きょうの鈴にしてみれば、なにもかもが、想像外の出来事のように思えるのだろうか。

「戦争になると、みんな、ホイホイ浮かれだすもんなのかい。カド屋に、そんなにも人がむらがるなんて……」

「いんや、客じゃねえ。あれがみんな客だったら、ウインドーの肉は、すっからかんになっちゃう。ラジオだ。店先のラジオのニュースに、みなしがみついているのさ。つぎにや、どんな戦果が



あがるかとな」

「ラジオも、だいぶ熱をもったことだらうよ、きょうは。トランスが燃えて、あしたあたり、みんなきこえなくなっちまうかもしらんね」

「おい！」

駿之助は、重そうなまぶたをはねのけ、じろりと鈴の顔を見すえて、

「エンギでもねえこと、ぬかすな。うかつなことというと、警察にひったくられるぞ。いま、日本中はだれもかれも、わきたっているんだからな」

さっさとすき焼きを作れ、という。鈴はそれ以上さからわず、紙包みをひらいて薄い竹の敷皮の上に盛りあがった肉に目をやったが、とたんに声を上げ、

「あれ、ま、こりゃロースでないかえ。まあ、えらいこった。床の間にかざっておきたいような」  
「ふうっふうっ……」

駿之助は、むせるような笑いかたをした。

「これで、こちとらのカミソリ・セットも、羽根がはえたように舞いあがるってもんだ。悪かあねえよ」

勝平は、そのとき部屋の隅で、一人であそんでいた。町のはずれの製材所からひろってきた木片を積みあげると、それがたちまちのうちにビルディングに変わったり、船や汽車になるのがおもしろい。無料で手にいれたただの四角い木片だから、不ぞろいで、ざらついでいて、市販されている積木のようなわけにはいかないが、それでも、ないよりはましである。ほかに円筒形の糸巻きに、割りばしを輪ゴムでとめた糸巻き戦車もある。糸巻き戦車は、木片の谷間をぬって進む。しかし、勝平の手はいつとはなしに緩慢になり、身体中の神経を二つの耳に集中させていた。

駿之助はいま、日本中が興奮でわきたっているような方をしたが、それは、まぎれのない事実であらう。一方、鈴のいうラジオというラジオが、あしたあたりこわれてしまうのではないかという表現も、決して大げさなものとは思えなかった。たしかに、町中のラジオは、朝からボリュームもいっぱい、鳴り通しなのであった。人びとは紅潮した顔でより集まり、仕事も手につかないようであった。寒気はいつもより鋭く、路上に、屋根に、霜のけはいさえ感じられる今朝十二月八日、ついに米英相手の、世界戦争の火ぶたが切られたのである。

その朝、勝平はまだふとんの中にいた。すっぼりと頭からかぶったふとんごしに、異常に緊迫した空気がつたわってきたのは、何時頃だったろうか。

「あ、やった、やった！ おい、ついにやったぞ！」  
そんな声が、まずのっけにきこえたのだ。

悲鳴にも似た、かん高い男の声が、路地裏のたるま横丁に飛ぶと、あとは、家の外も内もなかった。どこもかしこも騒然となった。勝平は眠りからさめた。ふとんの隙間からおずおずと顔を出すと、すでに自分のふとんをかたづけ、その空間にチャブ台を置こうとしていたカヨ子の視線とかがちあった。

「なんだろ、勝っちゃん？」

カヨ子は立ったまま、奥歯にももののはさまったような顔をする。

「なんだろ。いま、どっかで人殺しみたいな声がしたけどな」

勝平はいった。

人殺しの場面を見たことはないが、もし、そんな血なまぐさいそばにいたとしたら、人はたぶん、あのような奇態なさけびをあげるのではないだろうか。窓をあけてみた。野良犬のアカが、

けたたましく吠えだてる。号外の鈴の音が、ちりんちりんと往来を疾駆とっくしていくのがきこえ、家のラジオから響いてくるアナウンサーの音声もオクターブ高く、その息づかいまできこえるようであった。そういえば、鈴も、駿之助もない。

「あれ、だれもないじゃないか」

カヨ子は、薄気味悪そうな顔をした。

「かあちゃん、かあちゃん」

と、階段をおりて、下へいく。

「ごほん、まだ？」

下駄をつっかけ、台所にむかってそういいかけた勝平は、ふっと足をとめた。暗くて、足もとのおぼつかぬ通路をへだてて、お店のある居間に、みな肩をよせあい、棒立ちになっているのである。そこに古びた一台のラジオがあった。おたね婆さんも、寝巻き姿の甚一郎じいさまもいる。鈴も、駿之助もいる。律子もいた。そのとき、ラジオのアナウンスが、ふたたびおなじ調子で、臨時ニュースをくりかえしたのである。

「大本営陸海軍部発表、帝国陸海軍は今八日未明、西太平洋において、米英軍と戦闘状態に入り……」

勝平には、それがなんのことなのか、とっさに理解できなかった。が、とにかく、何事か大変なことが起きたらしい。

「ね、ね、ベイエイって、なに？」

と、異様な緊張の中へ頭からわって入れれば、まっ先にふりかえってくれたのは、鈴である。

「勝平、とんだことになっちゃったよ。戦争だよ、戦争がおっばじまったんだよ。アメリカとイ

ギリスを相手にしてさ」

「いつ？」

「今朝」

「今朝っていうと、ふーん、みんな寝ているうちにかあ」

戦争をしようというぐらいの連中は、昼間働き、夜は眠るような凡人とはちがうのだろう。二十四時間、ぎよろぎよろと目を光らしているのではないか。自分たちとは、まったく関係のないどこか別の世界で、別の人たちの手によって、ベイエイとの戦争ははじめられたようであった。

しかし、それにしても、勝平の身近な人たちの興奮はただごとではない。「馬鹿なことをしおった！」と、にがにがしく吐きだしたのは、甚一郎じいさまぐらいなもので、そのじいさまをなじるおたね婆さんも、駿之助も、律子でさえも、気がふれたような昂ぶりがあつた。意外に冷静なのは鈴である。

「ああ、そんな恰好してたら、風邪ひくじゃないかえ。さ、かえって早く着がえてきな。今すぐはんにすっからね」

と、いいながら、あわてて動きだしたが、それから朝食をおえて家を飛びだすまで、駿之助はついに戻ってはこなかった。だから勝平は、駿之助がその後、なにをして、どこへ出かけたのかもしらない。

一步外へ出ると、興奮はさらに無限大にふくれあがった感じがあつた。号外は乱れ飛び、町々は凄愴な殺気に包まれ、早くも日の丸の旗をかかげた家が多く、学校でも正午に授業を中止して、先生の声を合図に、みなはおをあらためて万歳、万歳を、声をかぎりにさげんだ。勝平ももちろんその一人だった。ところがそのとき、ごく小さな事件が起きて、勝平は一人だけ、興奮のるつ

ぼからはじきとばされることになる。

「だめだ、だめだ。いま、万歳の手が、頭の上で、こう、だらんとまがっていたのがいたが、これじゃ、日本は戦争に勝てん」

先生はいった。直接だれと名指しはしなかったが、その目はメガネのふちごしに、みんなの頭上を飛びこえ、勝平の瞳孔まで突きささってきた。勝平は、どきんとした。背すじのあたりを冷水がつきぬけて走る。教室はざわめいた。鴨下先生の目が勝平をとらえていることに気づいた生徒は、ごく少数だったかもしれないが、しかし、勝平にしてみれば、名前が表に出なかっただけに、かえってつらい。みんなの目がそれとなくそそがれる。それまでの緊張と興奮は、たちまちにして氷解してしまった。

「ちえっ、おれのことばかり……」

勝平は胸の中につぶやき、ふてくされた。

万歳の手が、すこしぐらいまがっていたからといって、それがなんだというのだろうか。第一、それを指摘する先生のほうは、冬ともなれば、いつもだらしなく鼻水を垂らしている。つけとどけをする者をえこひいきし、鼻水を垂らしていても、戦争に勝てるのだろうか。よっぽど、そういってやりたかった。

事件というにしては、それは、あまり小さかったかもしれないが、しかし、勝平はすねた。もう興奮の渦中になんか入っていきやしない。

学校がおわると、裏門づたいに一人だけ曳舟川まで出て、川のふちの製材所の空地に、ぼつんとすわった。いつもは、トタン屋根をゆすぶるばかりにカッターがうなり、おがくずだらけの男たちが何人もキビキビと働いているのに、だれもない。人っ子一人見あたらず、カッターが金

属性の歯をむきだしているだけだった。男たちは、どこへいったのだろう。これまた、ラジオの前に釘づけになって、つきつき報じられる戦果に、熱狂しているのにちがいないのである。

寒かった。勝平は、ぶるんと肩をひとふりゆすって、材木の上にすわり、しばらくの時をすごした。宣戦の大詔たしよがおりてこのかた、町中がみなこどりしているのに、まるで一人だけ戦争の外へ押し出されたみたいであった。だれが悪いのかといえ、先生の責任だ。勝平は、ちっと舌うちする。しかし、ただすわっていてもしかたないから、おがくずの中をあさり、正方形に近い木片をひろい集めて、ランドセルにつめて家へかえった。

日は暮れても、人びとの熱気はまだ路地裏にあふれている。帝国海軍は、ハワイの米国艦隊に決死的な大空襲をやったという。かと思うと空軍は香港も攻撃し、上海ではイギリスの砲艦を撃沈、シンガポールも爆撃したうんぬんと、だるま横丁の大人たちは、「やった、やった」を口々に連発し、狂喜した。

夜、駿之助がみやげに持ってきた牛肉が、鉄鍋の中でぐつぐつと煮えたった。

「さあ、食べ。きょうという日は、特別めでたい日だ。さっさと食わんことには、なくなるぞ。なくなつてからさわいでも、わしは知らんからな」

と、駿之助は、もったいぶった口調でいう。いいにおいだ。においまでちがう。だが、勝平の中には、いささかのためらいがある。駿之助がみやげなど買ってくるのもめずらしければ、こんな上機嫌なものめずらしい。これもみな戦争のせいなのか。そう思ったとたん、さっきの先生の顔が思いだされる。気安くハシをのばしていったら、またまた足もとをすくわれるような不安に、勝平は肩をすぼめた。

「あれ、この肉、やつこいわあ」

一口ほおぼったカヨ子が、目を丸くしてさげんだ。

「あたりきだ、特上だ」

駿之助は、ちびりちびりと酒をやりながらいう。

「でも、いつもの肉とちがうわ。いつものは、ほら、かめないじゃない。それが、とろとろんと口ん中でとろけちゃうみたいよ」

「そりゃ、おまえ、ロースだもの」

と、鈴が誇らしげにいう。

「ロースって、いいなあ。こんだ、いつも、これにしようよ」

「馬鹿！ こんなのは、目ン玉がとびぬけるほどするんだ。年に一回でも口に入りゃ、それでオンの字ってもんよ」

駿之助は、つまヨウジを口にくわえて笑った。その笑いがみるまに硬ばって行って、

「勝平、なんだ。気にいらんのか？」

「ううん」

「食うんなら、さっさと食え」

駿之助は、酒にぬれた唇をべろりとなめて、まだなにかいいたげな気配だったが、この時いちやくはやく気をきかしたのは、鈴である。

「それにしても、どうなるんかねえ。こんどの戦争だけどさ」

「なにが？」

「なにがって、あんた、みんながみんな浮かれてるけど、アメリカは、ケタちがいにはかでない国じゃないかえ。あんな大きなところと戦争してさ……」

「でかいばかりが能じゃねえ。小粒でもピリリとからいというだろが。それに、なんたって、日本は神国だ。世界の一等国だ。この肉みたいにな」

「あたしら食ってるのは、いつもコマとスジばかりだよ」

「だからよ、今日は一等国の気分でいこうってんじゃねえか」

「今日だけかい？」

鈴はときにして、ズバリとした迫りかたをする。それは単に肉だけのことではない。駿之助は、にがにがしげな顔をした。ふん、と鼻先に冷笑にも似たものをただよわし、

「今日だけってことはねえ。要は、カミソリ・セットの伸びいかんだ」

「アテにしちやいないけど、元手だけでもとりかえしてもらわにゃ……」

「わかってる！」

ぐいと、盃をほした。

勝平はその間に、敏速にハンを動かして、特上肉をひろっては、せつせと口に運んだ。早いところ口におさめないことには、またいつ横ヤリが入るかわからなかった。ほんとうは、駿之助の思わせぶりたらたららの土産ものなんぞに手をつけたくはないのだが、すぎ腹をかかえていては、そんな意地も通せない。

カヨ子のいう通り、たしかに舌の先がとろけそうである。肉といえは、今までのところ、口にいったら最後、容易にかみきれるものではなかったのだ。「かたくってよう」といえば、「ばか、くんのんじまえ」と、駿之助はいった。捨てるのも惜しく、かといって呑みこむのもそれおそろしく、肉をかみかみ学校へいき、授業中は、そと舌の下へしまっておいたこともある。午後、家へかえってきても、口の中にまだ、ほろくずのような肉が、かみきれずに残っていた。それが



肉というものだと思っていたが、どうやら肉にもいろいろあるようである。

こんな肉を食べるんなら、戦争も、まんざら捨てたものじゃないと思う。

夕食をおえてから、勝平は階下へおりた。ガラスの倉庫もかねている作業場には、ほこりだらけの裸電球がわびしくともり、そのにぶい照明の下で、甚一郎じいさまがまだ仕事をしていた。

「ああ、うまかった！」

そういって、戸をあけて外へ出ようとする。

「勝平か」

甚一郎じいさまが、ふりかえった。度の強いメガネが鼻先にまでずり落ちて、ひさしのように出ばったまゆの下に、小粒のくぼみがちの目が勝平をとらえる。寡黙な老人の思慮ぶかい目だ。

「なに食った？」

と、にこりともせずいきく。

「あのね、うんとね、トビキリ上等の肉」

「ほう、大したごちそうじゃな」

「だって、おじいちゃん。今日はめでたい日だもんな」

「だれがいった？」

「とうちゃんがさ」

「くだらん」

老人は、言下に気むずかしい表情でいった。

外に出て、電柱の根本に小便をするつもりだった勝平は、そこで足をとめる。甚一郎じいさまのごましおひげにおおわれた浅黒い横顔を凝視した。眉間にもほおにも、まるで小刀でえぐった